

神奈鍼第二回学術講習会報告

去る10月22日小田原市民会館に於いて平成18年度第二回学術講習会が開催されました。まず最初に杉田会長から今年の1月31日に新聞・テレビ・インターネットなどで「医師資格無く血を抜く鍼灸院経営者ら2容疑者逮捕」などの見出しで報道されていた記事について、誤解を招きかねない表現が見受けられ、患者さん方に不安を与えたのではないかと懸念されましたので、報道に関してマスコミ関係者にご配慮頂くよう刺絡と瀉血の違いを強く説明されて始まりました。この「鍼で血を抜く」という治療には「瀉血」と「刺絡」が含まれます。「刺絡」=刺絡鍼法は鍼灸治療の一つであり、特殊な鍼を東洋医学の経穴(ツボ)や経穴に刺入する方法です。これは、鍼師に関する法律で規定される業務範囲です。鍼の特性で血液が出る場合もありますし、病状によっては悪血や邪気を取るため、出血を促進させる措置を取ることもあります。西洋医学で行われている瀉血とは起源も方法も全く異なるものです。瀉血と刺絡と混同されることの無いようにご配慮をお願いしたいと思います。癌の患者さんを例に手術で病気が治せるかという問いかけに、癌が出来る体質に変化がなく悪いところをとっただけで本当に治るのか?癌だけに限らず悪いところを作った本当の原因はとれたのか?そこが問題であると……。班目先生は刺絡、自律神経免疫療法に加えて気診治療を併用しておられます。西洋医学の発達で感染症は激減したがMRSA(抗生物質は全く効かない)の出現がある。細菌が出たら殺せ、癌なら取ってしまえば、本当にそれでよいのか?先生は自律神経免疫療法と称して患者が自分で実行できる方法として、爪もみ、湯たんぼ療法を推奨しておられました。先生は「体質とは何か?」の問いかけに「いわゆる体質」と、答えの解りにくいことを述べられておりましたが、私は、鍼灸マッサージを継続して続けることによりどの疾患にどうと言うことではなく、非特異的変調作用として、その人の神経系統とかホルモンの作用が今までとは違った反応パターンをとるようになり、やがては慢性疾患を追い出したりその人の体質が変わってくるものと思っております。医者選びも寿命の内と言われておりましたが、患者自身に合った治療法が大切であると思われれます。その為には我々三療師はいろいろな治療法を持って患者に接し、引き出しを多く持つことの必要性があると思われれます。特に最後に強調されておりましたことは、癌に限らず病気になる方法として、働き過ぎ(日常生活の過ごし方、メリハリのある生活)、睡眠不足(21時就眠の朝6時起き、入院患者の病棟や、刑務所がそうであるように)大酒(睡眠の質が落ちる)、悩み(ストレス)が非常に大切であると……。これは古くから古典にも記されているし、全鍼師会のポスターにもキャッチフレーズとして書かれておりますように、自然との調和そのものであります。我々三療師は患者の施術の前に自分自身の健康にもう一度普段の生活を見直してみてもと気付かされた次第です。参考までに講習会に参加されなかった会員さんに湯たんぼ療法の温める場所をお知らせしておきます。腹部、尻、大腿前側、上腕三頭筋の皮膚の冷たいところを脇の下の温度と同じになるように温めてください。まだまだこの紙面では書ききれない程の内容が盛りだくさんでありました。

第五ブロック 梅田 勲